金冠塚出土漆器の調査

著者	金 庚洙, 大谷 育恵(訳)
著者別表示	KIM Kyoung-su, OTANI Ikue [trans.]
雑誌名	金大考古
号	78
ページ	159-165
発行年	2020-06-30
URL	http://doi.org/10.24517/00059502

Creative Commons : 表示 - 非営利 - 改変禁止
http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/3.0/deed.ja

塗りした器表面に朱色の草書体で「东」という漢字銘文が書かれており注目される。薄い木心に内面が朱色で漆塗りされており、扁平な底の破片が一部残っていた。

図面 152-2 は器形が分からない漆器の残片で、黒色地に朱色で歩行する姿の牛や馬を描いた。

図面 152-3 もまた動物文が描かれた残片で、尾を上に上げて鬣をなびかせて走る姿の馬の後ろに 2 頭の歩行する姿の馬が描かれており、共に朱色で外形を描き、黄色で細部を描写している。特に走る姿の馬は、尾を振り立てた形と鬣の描写などその全体的な姿が天馬塚出土の白樺樹皮製障泥に描かれた天馬と似た姿をしており注目される。

図版 154-1 は深さのある円筒形の盞とみられ、口唇部周囲に 1.5cm 幅の朱色線帯を巡らし、その間には朱色と黄色で構成した鋸歯文を、そして鋸歯文間の空間には 4 個ずつの黄色珠文を入れた。朱色線の下には狭い間隔で黄色と朱色の 2 本が巡る線を入れ、胴部に一体の鳳凰を描いている。

図版 154-2 も深さがある小型盞とみられ、黒色で漆塗りした器表面に鋸歯文と水鳥とみられる小さな鳥を数羽描いている。口唇部周囲に描かれた鋸歯文は朱色と黄色を交互に使用し、上下互い違いに描いており、胴部に朱色で描かれた鳥も器表面に 3 ～ 4 段に互いにずらして配置されている。

図版 154-3 も残存状態から見て盞と考えられ、先述したものに比べてサイズが小さいものとみられる。黒色で漆塗りした器表面の口唇部周囲に朱色線を配置し、その間に 2 条の平行波状文を朱色で描き、そしてその下に黄色珠文を入れた。胴部には全面に 3 段の火焔文式に表現した山形を連続的に描き、その間あいだに 8 個の方点が周囲にめぐる珠点を入れている。

図版 154-4 は器形不明のもので、朱色地に斜格子文を描き、その間に黒色円文を描き入れ、外縁には鋸歯文を描き、間あいだに小さな珠文を配置している。残片から判断すると、器内外面が共に朱色に漆塗りされていたものとみられる。

この他にも各種文様が描かれた多くの破片がみられるが、その輪郭を確認するのが困難な残片については省略する。

原載：

文化財研究所・美術工芸研究所編 1985『皇南大塚 Ⅰ（北墳）発掘調査報告書』文化財管理局 :137-138.

公開先：

『皇南大塚』北墳（韓国文化財庁 HP）：

http://www.cha.go.kr/cop/bbs/selectBoardArticle.do?nttId=15890&bbsId=BBSMSTR_1021&pageIndex=1&pageUnit=10&searchCnd=tc&searchWrd=%ed%99%a9%eb%82%a8%eb%8c%80%ec%b4%9d&ctgryLrcls=&ctgryMdcls=&ctgrySmcls=&ntcStartDt=&ntcEndDt=&searchUseYn=Y&mn=NS_03_08_01

金冠塚出土漆器の調査

金庚洙（キム キョンス）
（韓国国立中央博物館）
（大谷 育恵 訳）

Ⅰ．はじめに

漆は漆の木から採取した天然塗料で、古代より日常生活用具と工芸品など各種器物の外観を飾る材料として利用されてきた。わが国では慶尚南道義昌郡茶戸里と全羅南道光州市新昌洞などの地から多数の漆器資料が出土しており、それ以前の時期である青銅器時代から漆器が製作・使用されていたことが確認された。

漆技法は各時代と周辺環境の影響を受けて変化したり発展したものであり、漆技法は時代的・地域的特性を通過してきている。したがって漆技法の細部的な部分を把握することは、漆を媒介とする文化の交流を解明するための大きな助けとなる。

Ⅱ．調査対象および方法

2.1. 調査対象

金冠塚から出土した漆器を対象としたが、元々の形態を保っているものはない。このうち、試料採取が可能な 7 点を対象に調査した。大体の漆器は内側が赤く外側が黒い色に作られているため、同じ番号で登録されたもののうち、赤く見える漆片とそれ

以外のものを 1 片ずつ調査し、類似するものは 1 片のみを分析対象とした。

2.2. 調査方向

試料片をシリコンゴム枠に垂直に立てて入れた後、低粘性の透明エポキシ樹脂を充填して減圧し、脱気した。エポキシ樹脂で固定した試片の片面を研磨布で磨いて平面を作り、同種のエポキシ樹脂で顕微鏡用スライドグラスに付着させたのち、再び 30 ㎛以下の厚さに研磨加工して薄膜試験片を製作した。そして透過光顕微鏡と偏光顕微鏡観察、および SEM-EDS 分析を実施した。

Ⅲ. 結果

3.1. 古蹟 23328 漆器片

合計 4 点の試料片を採取して調査した。4 点の si 試片は漆技法がそれぞれ異なっていたことからみて、最低でも漆器 2 個体が混じっていることが分かる。下地漆 (初漆) なく製作した 2 点の試験片が 1 個体とみられ (写真 1,2)、下地漆上にそれぞれ漆層と顔料層が存在する 2 点の試験片が別の 1 個体とみられる (写真 3,4)。2 個体とも赤色の漆には辰砂 (HgS)(表 2,3) が使用されていた。2 個体とも内面には赤色の漆を施し、外面には黒色の漆を施した

表 1　調査対象

No.	対象資料	試片の数	備考
1	古蹟 23328 漆器片	4 点	2 個体の漆器と推定される
2	古蹟 23338 漆器片	2 点	赤い漆片 1 点、黒い漆片 1 点
3	古蹟 23381 漆器片	1 点	黒い漆片 1 点
4	古蹟 23405 漆器片	1 点	赤い漆片 1 点
5	古蹟 23479 漆器片	2 点	赤い漆片 1 点、黒い漆片 1 点
6	古蹟 23492 漆器片	2 点	赤い漆片 1 点、黒い漆片 1 点
7	古蹟 23497 漆器片	2 点	赤い漆片 1 点、黒い漆片 1 点

写真 1　黒色漆片の顕微鏡写真

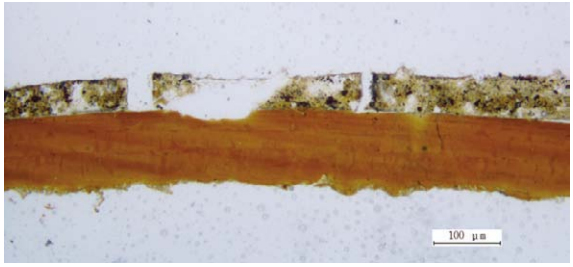


写真 2　赤色漆片の顕微鏡写真

写真 3　黒色漆片の顕微鏡写真

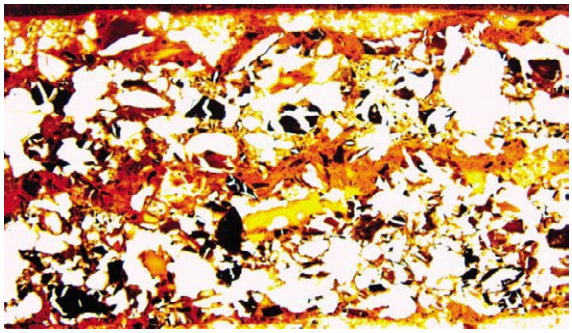


写真 4　赤色漆片の顕微鏡写真

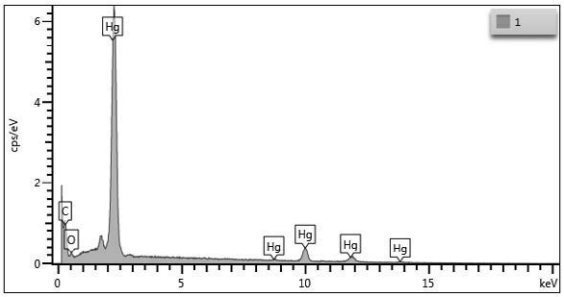


表 2　写真 2 の顔料層 SEM-EDS 分析の結果

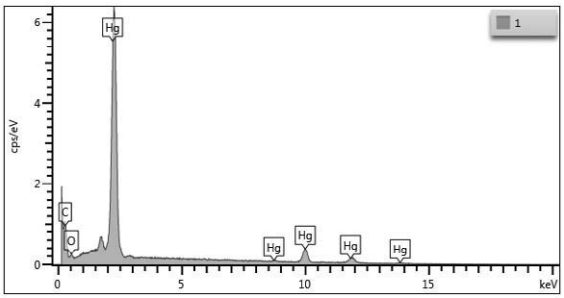


表 3　写真 4(訳 1 の顔料層 SEM-EDS 分析の結果

古蹟 23328

内朱外黒形態に製作されたものとみられる。

3.2. 古蹟 23338 漆器片

2 点の試験片を調査した。一片は下地漆上に漆を2 回かけ (写真 5)、赤い漆片は下地漆を施した上に赤色顔料を使用した漆をかけている (写真 6)。内側は赤い漆を塗り、外側は黒い漆を塗って製作したものとみられ、赤い漆には辰砂 (HgS) を使用している

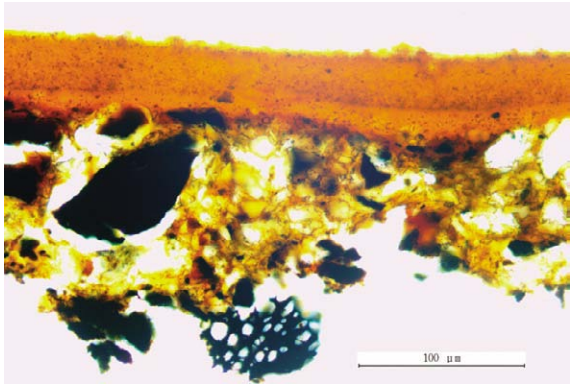


写真 5　黒色漆片の顕微鏡写真

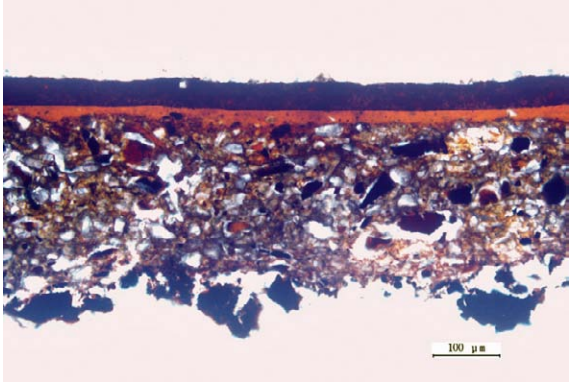


写真 6　赤色漆片の顕微鏡写真

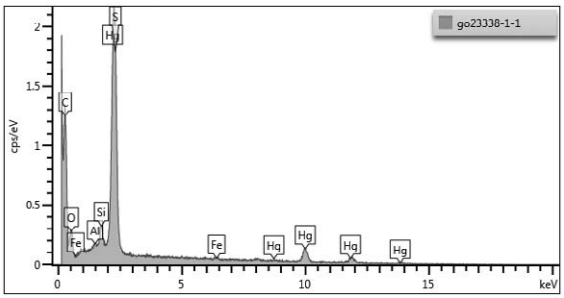


表 4　写真 5 の顔料層 SEM-EDS 分析の結果
古蹟 23338

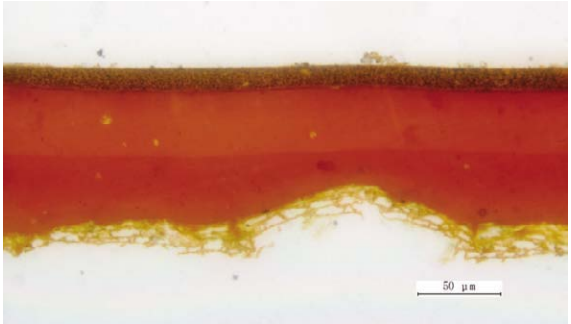


写真 7　黒色漆片の顕微鏡写真
古蹟 23381

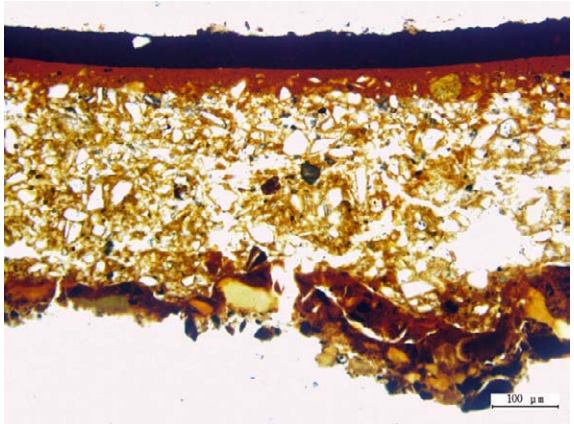


写真 8　赤色漆片の顕微鏡写真

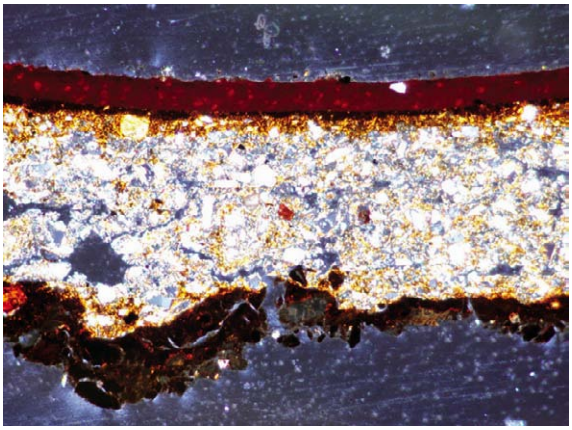


写真 9　赤色漆片の偏光顕微鏡写真

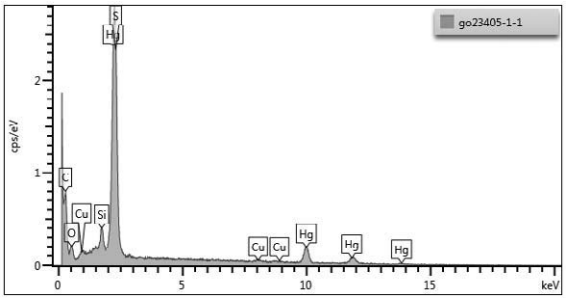


表 5　赤色漆片顔料層の SEM-EDS 分析の結果

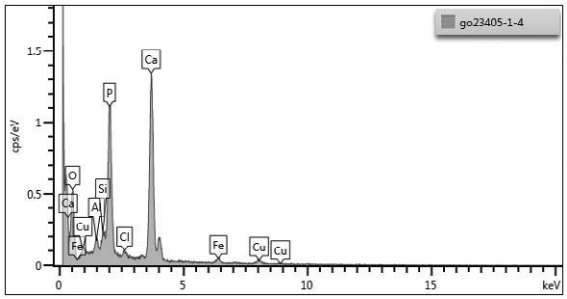


表 6　赤色漆片下地漆の SEM-EDS 分析の結果

古蹟 23405

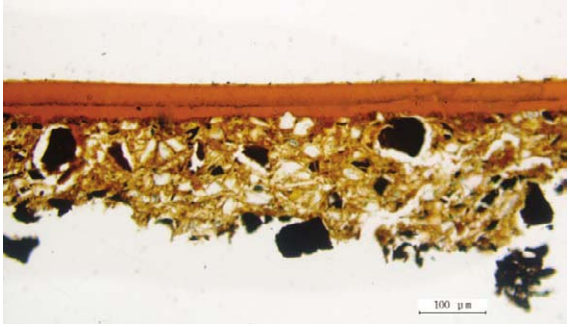


写真 10　黒色漆片の顕微鏡写真

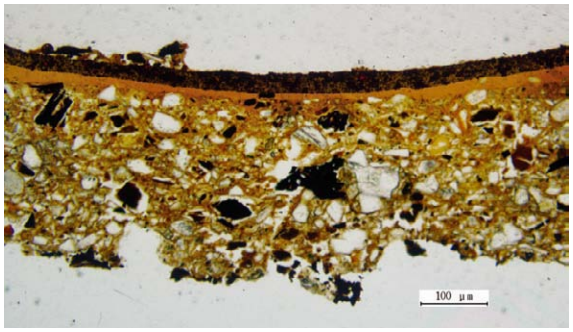


写真 11　赤色漆片の顕微鏡写真

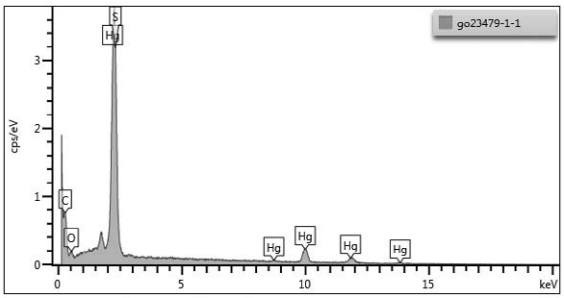


表 7　赤色漆片顔料層の SEM-EDS 分析の結果
古蹟 23479

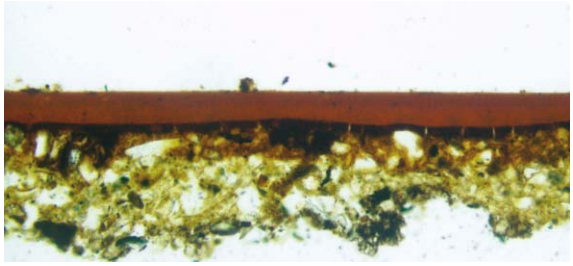


写真 12　黒色漆片の顕微鏡写真

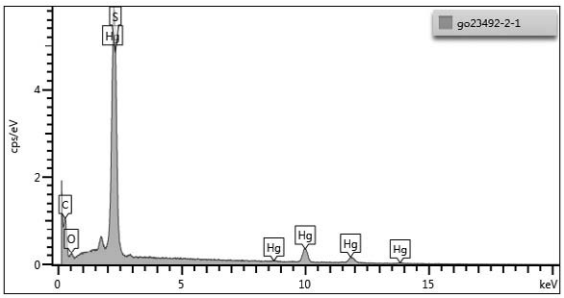


表 8　赤色漆片顔料層の SEM-EDS 分析の結果

(表 4)。

3.3. 古蹟 23381 漆器片

1 点の試験片を調査した。黒い色の漆片である。下側の基盤面に木材組織が観察されていることから、木の上に別に下地漆なくそのまま漆を塗った木心漆器とみられる。合計 3 枚の層で構成されており、漆面が非常に平滑である。有機物を材料に使用して色を付けたものとみられる (写真 7)。

3.4. 古蹟 23405 漆器片

赤色の漆片 1 点を使用して調査した。2 層の下地層であり、その上に辰砂 (HgS) を混ぜた赤い漆を塗って製作されている (表 5)。特に下の下地層は SEM-EDS 分析の結果、燐 (P) とカルシウム (Ca) が検出され、骨粉を使用したことを確認した (表 6)。そしてその上に土粉を混ぜた下地漆を施している (写真 9)。

3.5. 古蹟 23479 漆器片

下地漆上に漆を 2 回塗ったもの (写真 10)、赤色顔料に辰砂 (HgS) を使用したもの (表 7) を比較すると、「3.2. 古蹟 23338」のような方式で製作されたことが分かる。

3.6. 古蹟 23492 漆器片

2 点の試験片を調査した。黒色漆片は下地漆上に

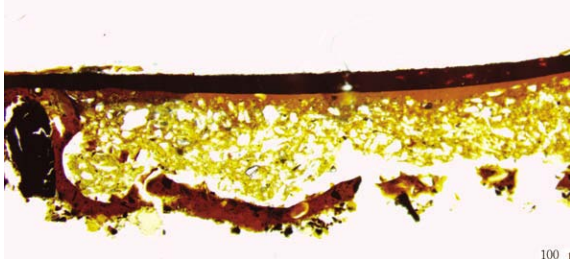


写真 13　赤色漆片の顕微鏡写真

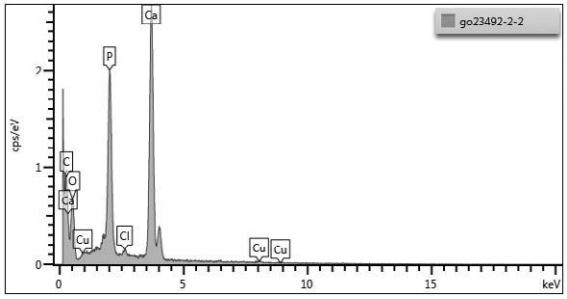


表 9　赤色漆片下地漆の SEM-EDS 分析の結果
古蹟 23492

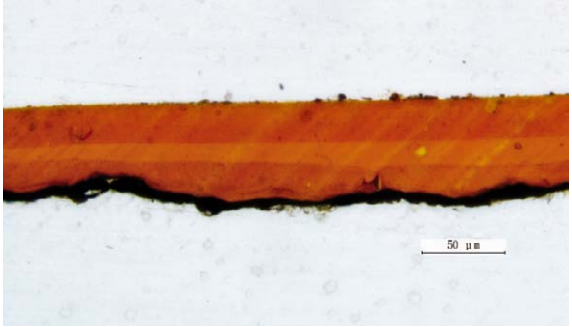


写真 14　黒色漆片の顕微鏡写真

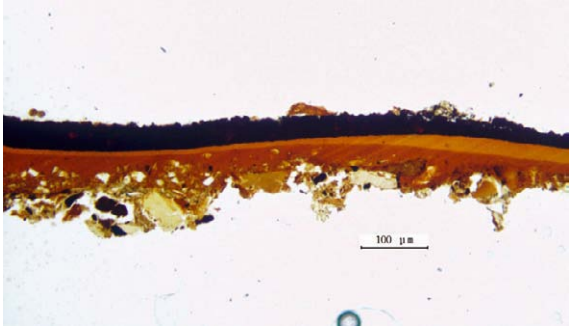


写真 15　赤色漆片の顕微鏡写真

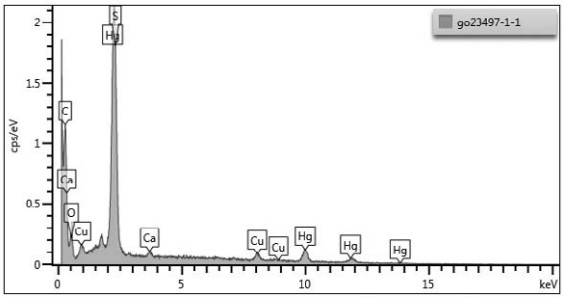


表 10　写真 15 顔料層の SEM-EDS 分析の結果

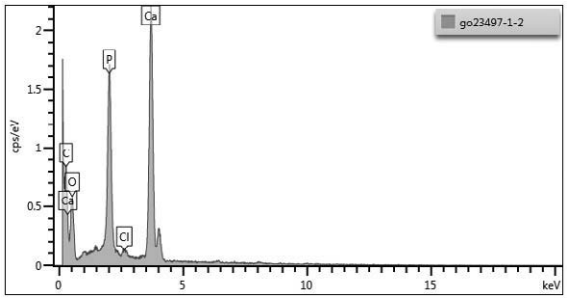


表 11　写真 15 下地層の SEM-EDS 分析の結果

古蹟 23497

表 12　漆技法調査の結果

連番	対象資料	結　果
1	古蹟 23328 漆器片	2 個体 : 下地漆ない 1 個体 (木心漆器), 下地漆 (土粉 + 骨粉)1 個体 , 顔料 (辰砂)
2	古蹟 23338 漆器片	下地漆 (土粉), 顔料 (辰砂)
3	古蹟 23381 漆器片	下地漆なし (木心漆器), 顔料 (不検出)
4	古蹟 23405 漆器片	下地漆 (骨粉の上に土粉), 顔料 (辰砂)
5	古蹟 23479 漆器片	下地漆 (土粉), 顔料 (辰砂)
6	古蹟 23492 漆器片	下地漆 (骨粉の上に土粉), 顔料 (辰砂)
7	古蹟 23497 漆器片	2 個体 : 下地漆ない 1 個体 (木心漆器), 下地漆 (骨粉の上に土粉), 顔料 (辰砂)

黒色顔料を塗って漆を施すことで黒色に見えるように製作したもので (写真 12)、赤色漆片は 2 層の下地漆を施し、その上に辰砂 (HgS) を使用した赤い漆を施したものである (表 8, 写真 13)。2 層のうち下層は骨粉を使用しており、その上に土粉を混ぜた下地漆を施している (表 9, 写真 12)。

3. 7. 古蹟 23497 漆器片

2 点の試験片を調査した。黒色漆片 [訳 2] は底面に意図的に黒色顔料を塗り、その上に漆を 3 回かけて製作している (写真 14)。赤色漆片は 2 層の下地漆を施し、その上に辰砂 (HgS) を混ぜた赤い漆をかけている (表 10)。2 層のうち下層は骨粉を使用し、その上に土粉を混ぜた下地を施している (表 11, 写真 15)。

Ⅳ . 考察

漆技法を調査した結果を見ると、大きく分けて下地漆がない木心漆器製作方法 (古蹟 23328-1 個体 , 古蹟 23381, 古蹟 23497-1 個体) と下地漆のあるもの (古蹟 23328-1 個体 , 古蹟 23338, 古蹟 23405, 古蹟 23479, 古蹟 23492, 古蹟 23497-1 個体) の 2 つにわけることができる。また下地漆のあるものも、土粉を基本とするものと骨粉と土粉を使用する方法のものに分けられる。赤色に使用された顔料は全て辰砂 (HgS) と分析された。

これより前の時期の漆技法の資料には北の楽浪出土漆器があり、似たような時期のものとして南の茶戸里遺跡出土漆器等を指摘することができる。

楽浪出土漆器の製作技法では、下地漆に骨粉、土粉が使用された例を見出すことができる (写真

写真 16　楽浪出土の漆耳杯

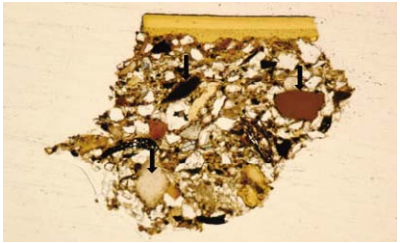


写真 17　漆耳杯の外面

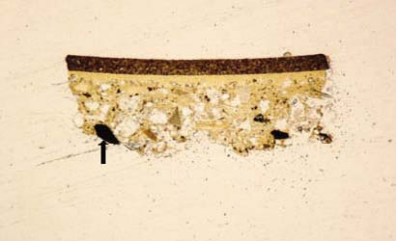


写真 18　漆耳杯の内面

写真 19　茶戸里出土の円形高坏

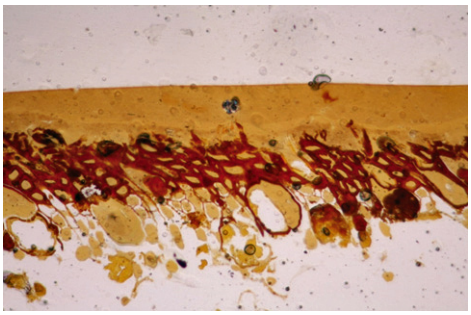


写真 20　円形高坏の漆塗膜顕微鏡写真

16,17,18)。しかし木材上に直に漆を塗った木心漆器の製作方法は見当たらない。

一方で茶戸里遺跡出土漆器を調べてみると、木材上に直に漆を塗った木心漆器の製作技法が多く観察される (写真 19,20)。逆に下地漆に骨粉、土粉を使用した製作方法は見出し難い。

金冠塚からはこのような 2 つの方式の漆技法が共に確認された。これは時間の経過に従って北の漆技法と南の漆技法が混ざって変化した現象とみられる。また正確な形態は分からないものの、漆技法だけみれば楽浪漆器と同じく内側が赤く外側が黒い漆器と茶戸里と同じ木材上に直に漆を施した形態の漆器が共に使用されたものと推定される。

調査過程で対象資料 7 点 (登録番号に基づく) のうち、2 点の製作方法が違う 2 個体が混ざったものが確認された。試験片が全て破片状態であったために、同一番号で登録されたものも確実に一個体であると確信することができないというのが今回の調査の限界である。

訳註：

訳 1) 原文キャプションは「表 3　写真 5 の顔料層 SEM-EDS 分析の結果」とあるが、写真 5 は後述される古蹟 23338 のものであり、ここで述べられている古蹟 23328 のものではないので誤り。本文 (p.160 左 , 下から 3~4 行目) の記述からみて写真 3 と 4 が表 2 と 3 に対応しているようなので、「表 4」に訂正した。また掲載図も表 2 と誤って重複している可能性があるが (表右上が共に「1」になっている)、著者は故人のため確認できず、指摘のみしておく。

訳 2) 原文には「漆層」とあるが、一つ後の文との対比と写真 14 のキャプションから考えて「漆片」の誤りと思われるため訂正した。

参考文献（刊行年順）：

金庚洙（キムキョンス）・兪恵仙（ユヘソン）・李容喜（イヨンヒ） 2003「楽浪古墳の漆技法調査 (Ⅰ)」『박물관보존과학』4 국립중앙박물관 :79-88. [『博物館保存科学』4 国立中央博物館]

李容喜（イヨンヒ）이용희 2010『한국 고대칠기의 기법 연구』공주대학교 석사학위 논문 . [『韓国古代漆器の技法研究』公州大学校 修士学位論文]

原載：

金庚洙（キムキョンス） 2016「金冠塚出土漆器調査」『慶州金冠塚 (遺物篇)』(日帝強占期資料調査報告 23 輯) 国立慶州博物館 :285-292.

公開先（韓国国立中央博物館リポジトリ）：

https://www.museum.go.kr/site/main/archive/report/article_12967

翻訳後記：

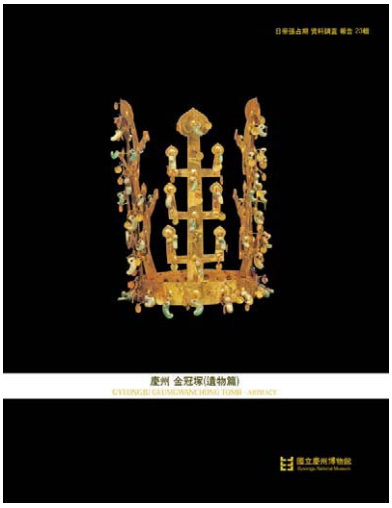
本稿では 7 点の漆器片が調査されており、その遺物番号が明示されている。該当遺物のうち、報

告書の報告本文で個別に解説されているのは「古蹟23328」のみである。参考のため該当部分の訳出を付記しておく。

『慶州金冠塚（遺物篇）』15 頁：

48. 金銅漆器蓋片 (図面 4, 図版 4) －古蹟 23328

蓋を木製で作成し、外面に金銅板を被せており、蓋身の一部が残っている。木製部分に被せた金銅板は円頭釘で固定した。他の金銅製盒の蓋のように、蓋身中央に花弁三弁が広がった形態である。木製部分には漆塗りした痕跡が確認された。[残存高 1.7cm, 残存長 6.1cm]



付 3：

壺杅塚で出土した鬼面の盛矢具

大谷育恵

本特集の冒頭論文「茶戸里遺跡出土漆器の漆技法の特徴－漆塗膜の構造解析を通した漆技法の研究－」において、三国時代の漆器で漆塗膜断面の顕微鏡観察が行われた資料に壺杅塚で出土した鬼面の盛矢具 (胡籙(ころく)) がある [本号 ,p.9]。論文中に「鬼面の盛矢具 (木心漆面)」とあるように、報告の段階では疑問があるとしながらも、用途は面として報告されていた遺物である。論文中に図版の掲載がないため、原報告の該当部分とともに参考のため付記しておく。

『慶州路西里 壺杅塚と銀鈴塚』43~46 頁：

（五）その他

(1) 木心漆面 (図版 45,46)

今回の発掘品の中でも最も注目に値する遺物である。出土位置は西側であり、その場所から鉄斧と鉄製の有棘穂袋武器が発見された。

漆面の構造はまず木で作った上に漆塗りしたもので、眼球は玻璃でその虹彩に該当する部分のみは青い光を有している。そして目は黄金環で囲んでおり、写真にはよく表れていないが 2 本の角が表現されており、その角は腐食が甚だしく、外観は詳細には推測できないことが遺憾である。写真に見えるように、この面は左が右よりも長めに突出しており左右同形ではないが、本来は右も左のように伸びていたはずであり、上からの圧力が加わったことでこのような外観になったものである。角と角の間の漆面上部の縁をなす部分は鉄でできており、その上に黄金で点を刻み入れている。面とはいえ 1 つも穴が開けられた場所がないため、顔面に付けると見ることができず、したがって実際には胸のようなところに付けたのではないかと考えられる。また胸に付けたのでなければ、あえて人が着用したとは考えず、独立した仮面と考えることもできる。

この面の性格に対しては、これはすでに『周礼』夏官にみえる方相氏の面であると考えられる。

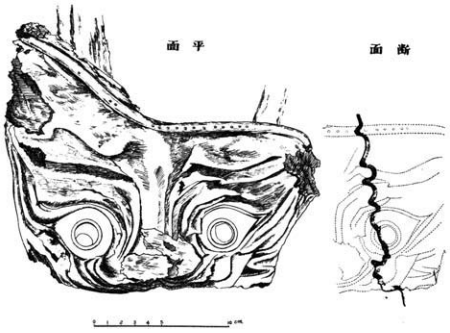
『周礼』

方相氏掌蒙熊皮、黄金四目、玄衣朱裳、執戈楊盾、帥百隷而時難、以索室駆疫。大喪先柩、及墓、入壙、以戈撃四隅、駆方良。

……(以下方相氏に関する記述がつづく)

原載：

金載元(キム ジェウォン) 김재원 1948『慶州路西里 壺杅塚 과 銀鈴塚』(国立博物館古蹟調査報告 第 1 冊), 乙酉文化社 .

公開先（韓国国立中央博物館 HP）：

https://www.museum.go.kr/site/main/archive/report/archive_5655